

「のだ」と「のか」の使用・非使用に関する
文法および語彙知識の影響

Effects of grammatical and lexical knowledge on the usages of *-noda* and *-noka*

趙萍(麗澤大学大学院生)・玉岡賀津雄(名古屋大学)・木山幸子(麗澤大学大学院生)

ZHAO, Ping (Reitaku University), TAMAOKA, Katsuo (Nagoya University),

KIYAMA, Sachiko (Reitaku University)

Abstract: The present study investigated the effects of lexical and grammatical knowledge on the acquisition of *-noda/-noka* usages. The three tests (i.e., lexical, grammatical and *-noda/-noka*) were administered to 224 native Chinese speakers learning Japanese. Three groups, higher, medium and lower Japanese proficiency learners, were selected on the basis of lexical or grammatical knowledge. The learners with higher/medium proficiency in lexical knowledge showed significantly greater understanding in both use and non-use conditions of *-noda/-noka* than those with lower proficiency. In addition, the learners with higher proficiency in grammatical knowledge were the highest in understanding both the use and non-use conditions of *-noda/-noka*. Thus, grammatical knowledge seems to have a strong contribution to the acquisitions of *-noda/-noka* usages. Furthermore, the *-noda/-noka* non-use condition, which required only the judgment of ‘prescription (*kiteisei*)’, were mostly understood by the high proficiency group. However, no effects of either lexical or grammatical knowledge (i.e., no difference among the three groups) were found in the non-use condition, which required both judgments of ‘prescription’ and ‘relevance (*kanrensei*)’. The learners of Japanese correctly judged ‘prescription’, but showed difficulties in the judgment of ‘relevance’. Therefore, the present study proposes a two-stage cognitive processing model of ‘prescription’ and ‘relevance’ to identify *-noda/-noka* non-use.

1. 研究の目的

日本語母語話者同士の会話において、「のだ」とその疑問形式の「のか」は頻繁に使用される。しかし、「のだ」と「のか」の機能は多様であり、文の意味的な情報だけではそれらの付加を決めることができず、文脈や状況から得られる情報に依存しているために、習得が難しいと言われている(野田, 1997)。実際、外国人日本語学習者にとって、「のだ」と「のか」を使う場合と使わない場合とを適切に判断するのは難しい。そこで、日本語学習者の語彙および文法の知識が、「のだ」と「のか」の使用しなければならない条件(使用条件)と使用すべきでない条件(非使用条件)の習得にどのように影響しているかを検討するために、日本語学習者を語彙および文法テストの上位・中位・下位群とで比較した。

2. 「のだ」と「のか」の使用条件および非使用条件の分類

本研究では、「のだ」または「のか」を使用しなければならない条件を「使用条件」、使用できない条件を「非使用条件」とし、先行研究で指摘されている「既定性」と「関連づけ」という二つの視点(田野村, 1990; 野田, 1997; 大場, 1995; 近藤,

2008, など)に基づき, 日本語学習者の非用と過剰使用の両方の誤りのパターンから, 「のだ」と「のか」のそれぞれの使用条件と非使用条件に分類した。使用条件とは, 問題のことがらが既定的であり, なおかつ前言や前提と関連づける場合に「のだ」または「のか」を使用しなければならない条件(既定性あり関連づけあり)である。非使用条件①とは, 問題のことがらを既定の事態として捉えない場合に「のだ」または「のか」を使用できない条件(既定性なし)で, 非使用条件②とは, 問題のことがらが既定ではあるが, 前言や前提と関連づけない場合に「のだ」または「のか」を使用できない条件(既定性あり関連づけなし)である。

3. 調査の方法

3.1 調査対象者

2008年9月に, 中国の西安外国語大学で日本語を専攻する2年終了時の学生112名(女性84名, 男性28名), 3年終了時の学生112名(女性96名, 男性16名)の合計224名に対して, 日本語能力テストを実施した。

3.2 調査の内容

「のだ」「のか」の使用と非使用の理解を問うテストが72問, 語彙テストが48問, 文法テストが36問の3種類のテストを実施した(所要時間は約100分)。これら3つのテストの問題形式はいずれも四者択一問題である。

4. 結果

4.1 「のだ」と「のか」の下位カテゴリの習得についての相関

「のだ」「のか」それぞれの使用条件(既定性あり関連づけあり)と非使用条件①(既定性なし)および非使用②(既定性あり関連づけなし)の関係について, ピアソンの相関係数を使って分析した(表1)。

表1 「のだ」と「のか」それぞれの使用条件・非使用条件に関する相関係数

「のだ」「のか」の使用・非使用	1	2	3	4	5	6
1 「のだ」使用	—					
2 「のだ」非使用①	-0.18 **	—				
3 「のだ」非使用②	-0.12	0.50 ***	—			
4 「のか」使用	0.53 ***	0.02	0.01	—		
5 「のか」非使用①	-0.24 ***	0.77 ***	0.43 ***	0.02	—	
6 「のか」非使用②	-0.28 ***	0.55 ***	0.33 ***	-0.14 *	0.62 ***	—
満点	12	18	6	12	18	6
平均	8.22	9.14	1.07	8.77	9.50	2.16
標準偏差	2.34	4.24	1.22	2.33	4.30	1.53

注1: $n=224$. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$.

注2: 「のだ」全体と「のか」全体の相関係数は0.682 ($p<.001$)である。

まず使用条件について, 「のだ」の使用条件と「のか」の使用条件に比較的高い正の相関が見られた($r=.53, p<.001$)。また非使用条件について, 「のだ」の非使用①と非使用②($r=.50, p<.001$)および「のか」の非使用①と非使用②($r=.62, p<.001$)で高い正の相関が見られた。「のだ」の非使用①と「のか」の非使用①では, 非常に高い正の相関が見られた($r=.77, p<.001$)。「のだ」と「のか」の各条件が相互に関連し

ていることを示している。さらに使用条件と非使用条件の関係について、「のだ」の使用条件と「のだ」の非使用① ($r=-.18, p<.01$), 「のか」の使用条件と「のか」の非使用②には弱い負の相関が見られた($r=-.14, p<.05$)。

4.2 語彙力で分けた上位・中位・下位群による「のだ」と「のか」の習得の特徴

日本語学習者 224 名の語彙テストの平均得点は 32.10 点で、標準偏差は 7.23 であった。この中で、平均から標準偏差で + 1 だけ高い得点($32.10+7.23=39.33$)を四捨五入し、上位群を 39 点以上とした。46 名が上位群となった。次に、平均から標準偏差で - 1 だけ低い得点($32.10-7.23=24.87$)を四捨五入し、下位群を 25 点以下とした。43 名が下位群となった。中位群は、平均の 32.10 点から前後 2 点の広がり(平均 $\pm$ 2 点)とした。四捨五入した値で 30 点から 34 点の範囲の日本語学習者は 52 名だった。上位・中位・下位群の合計は 141 名である。これら 3 群の「のだ」「のか」の得点について、一元配置の分散分析を行った。

使用と非使用条件を合わせた「のだ」全体の正答率について、上位・中位・下位群の 3 群の主効果が有意であった [$F(2,138)=21.879, p<.001$]。シェフェの多重比較(以下、多重比較は全てシェフェによる)の結果、中位/上位群と下位群との間に有意な違いがみられた。また使用と非使用①②を個別に検討したところ、「のだ」使用 [$F(2,138)=4.341, p<.05$]、および「のだ」非使用① [$F(2,138)=14.776, p<.001$]において 3 群の主効果が有意であった。多重比較の結果、中位/上位群と下位群との間に有意な違いがみられた。「のだ」非使用② [$F(2,138)=2.035, n.s.$]については、主効果は有意ではなかった。

「のか」全体については、上位・中位・下位群の 3 群の主効果が有意であった [$F(2,138)=11.789, p<.001$]。多重比較の結果、中位/上位群と下位群との違いが有意であった。使用と非使用①②の個別の検討では、「のか」使用について、得点群の主効果が有意であった [$F(2,138)=11.902, p<.001$]。多重比較の結果、「のか」全体と同様、中位/上位群と下位群の間に有意な違いがみられた。一方、「のか」非使用① [$F(2,138)=5.854, p<.01$]について、下位群と上位群の間に有意な違いがみられたが、下位群および上位群と中位群の間に有意な違いはみられなかった。「のか」非使用② [$F(2,138)=1.694, n.s.$]においては、3 群の主効果は有意ではなかった。

4.3 文法力で分けた上位・中位・下位群による「のだ」と「のか」の習得の特徴

日本語学習者 224 名の文法テストの平均の得点は 27.87 点で、標準偏差は 4.17 であった。平均から標準偏差で + 1 だけ高い得点($27.87+4.17=32.04$)を四捨五入して、上位群を 32 点以上とした。43 名が上位群となる。次に、平均から標準偏差で - 1 だけ低い得点($27.87-4.17=23.70$)を四捨五入して、下位群を 24 点以下とした。45 名が下位群となる。中位群は、平均の 27.87 点から前後 1 点の広がり(平均 $\pm$ 1 点)とし、四捨五入した値で 27 点から 29 点である。この範囲の被験者は 61 名である。これら合計 149 名の上位・中位・下位群による「のだ」「のか」の得点について、語彙テストで分けた場合と同様の分散分析を行った。

使用と非使用を合わせた「のだ」全体については、上位・中位・下位群の 3 群

の主効果が有意であった[$F(2,146)=19.050, p<.001$]。多重比較の結果、全ての群間に有意な違いがみられた。使用と非使用①②を個別に検証したところ、「のだ」使用[$F(2,146)=9.515, p<.001$]と「のだ」非使用①[$F(2,146)=8.064, p<.001$]において3群の主効果が有意であった。多重比較の結果、下位群と上位群の間の有意な違いがみられたが、下位群および上位群と中位群の間にはみられなかった。「のだ」非使用②については、3群の主効果は有意ではなかった[$F(2,146)=1.514, n.s.$]。

「のか」全体についても、上位・中位・下位群の3群の主効果が有意であった[$F(2,146)=16.558, p<.001$]。多重比較の結果、全ての群間に有意な違いがみられた。個別の検討では、「のか」使用について3群の主効果が有意であった[$F(2,146)=14.365, p<.001$]。多重比較の結果、下位群と中位/上位群の間に有意な違いがみられた。また、「のか」非使用①[$F(2,146)=8.561, p<.001$]において3群の主効果が有意であった。多重比較の結果、下位群と上位群の間に有意な違いがみられたが、下位群および上位群と中位群の間には有意な違いはみられなかった。「のだ」非使用②については、3群の主効果は有意ではなかった[$F(2,146)=1.399, n.s.$]。

5. 総合考察

本研究の分析結果は、中国人日本語学習者の使用条件(既定性あり関連づけあり)、非使用条件①(既定性なし)及び非使用条件②(既定性あり関連づけなし)の理解に差があることを見出した。まず語彙知識による比較から、語彙テストが平均以上になると、「のだ」「のか」の使用および非使用①に関する理解がある程度高くなるものの、非使用②に関しては、語彙能力が高い群でもよく理解できないことがわかった。また文法知識による比較からも、下位群の「のだ」「のか」の理解が低く、上位群になっても中位群と比べてあまり高くなっていないことがわかった。さらに、非使用①の理解は下位群と比べて上位群で高くなっているものの、非使用条件②の理解については、文法能力が高くても伸びていなかった。

以上の結果から、中国人日本語学習者は、語彙や文法といった基礎的な日本語能力の習得が進むにつれ、使用条件の理解はできるようになるものの、非使用条件の理解にはただちに結びつかないことが窺える。とりわけ、既定的ではあるが関連づけはない場合に「のだ」「のか」を使用できないこと(非使用②)の理解は、基礎的能力が高い学習者にとっても困難なようである。これらの傾向は、言語の認知処理の観点から次のように考えられよう。非使用①は、既定性がないことのみで決められる条件である。それに対して非使用②は、使用の場合と同様、既定性が存在する条件であるが、既定的である場合には、さらに関連づけがあるかどうかを考えなければ、使用か非使用かを決めることができない。既定性の判断だけでは、「のだ」「のか」を誤って使用してしまうことになる。このように既定性の有無と関連づけの有無の二段階の認知処理を要することが、非使用②の理解の促進を妨げていると解釈できる。